

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより
第22号
2018(平成30)年10月26日
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

要は程度の問題 — 「山本家百姓一切有近道」より —

綿の収穫期もそろそろ終盤を迎えました。今年の和綿と洋綿の綿の吹きはじめは和綿が8月14日、洋綿が9月4日でした。緑色の固い綿の実がはじけて、中から白い繊維が顔を出すことを「綿が吹く」とも言います。ようやく一つ吹いたかと思うと、それからは連日、次から次へとどんどんはじけていきます。はじけた綿の実を収穫することを「綿を摘む」と言います。綿摘みは繊維のあふれ方の頃合いを見て行います。はじけて1日か2日後くらいが目安になるでしょうか。「ふっくら、ふわっと、おいしそうな状態」が最適と私は考えています。収穫はできるだけ昼過ぎから夕方にかけて行います。午前中は夜露等の影響もあり、まだ湿気を含んでいることが多いからです。綿の収穫、保管に湿気は禁物です。また、いったんはじけた実に雨があたると繊維が劣化します。はじけたまま長らく放置すると土埃なども付着します。天気予報にも気を配りながら、収穫を行います。

収穫した綿を、「実綿(みわた)」と呼びます。実綿はカゴに入れて、天気の良い日を選んで2、3日天日干しします。しっかりと乾燥させた後は、湿気の少ない所で、通気性を確保しながら保管します。収穫してから少なくとも1ヶ月以上は期間を空けてから、「綿繰り(わたくり)」を行います。綿繰りとは、実綿の中から種を取り出し、繊維のみを選び分ける作業です。綿繰り機は、2本のローラーに実綿を挟み込むようにして種を取り出します。収穫したばかりの実綿では種がまだ柔らかいため、ローラー部分に種が押し潰されてしまう可能性があります。こうして、種を取り除いた綿を「繰り綿(くりわた)」と言います。

さて、ここから繰り綿に混入しているゴミを取り除く必要がありますが、これがなかなか手のかかる作業です。なぜなら、ゴミ取りには終わりが無いからです。どこまでゴミを取り除けば良いか、判断に困ります。

ところで、このことに関連して先日、おもしろい記述を見つけました。『日本農書全集』(農山漁村文化協会刊)第28巻所収の「山本家百姓一切有近道」(文政6年、大和国山辺郡乙木村山本喜三郎著)に綿摘みに関する心得が記されており、ゴミ取り要領について以下のように記されていました。

「綿とりの事。是ハ段々にふく物なり。扱此綿をとるといふとも(中略)、又しりくその残らぬやう、気を付へし。又きん目もとらにや、是もよその引くらべ能弁へし。」(現代語訳：綿の収穫のしかた。綿はだんだんに吹き出すものだ。綿を摘むときには(中略)、そしてごみくずがついていないように気をつける。しかし、売る場合の目方も多くなければいけないので、よその綿とひきくらべてほどほどにしておきなさい。)(第28巻、昭和57年発行、206頁)

何を基準にゴミ取りをするか。要は程度の問題である、ということ。

ちなみに、山辺郡乙木村とは現在の天理市乙木町。木綿庵と同じ町内です。この農書は山本喜三郎が子孫のために農事暦ふうの毎日の農作業の仕方や生活の心得などをこと細かに書き記した貴重な史料です。機会をあらためて詳しく紹介したいと思います。



実綿と綿繰り機

Monthly Data

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成30年9月24日～平成30年10月23日)

青森県1、秋田県1、神奈川県2、滋賀県1、奈良県2、香川県1、福岡県1、佐賀県1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成30年9月24日～平成30年10月23日)

メールを含む各種相談件数7、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数5件9名



【ワークショップ】 — 畑の綿から糸を紡ぐ、昔の生活体験ワークショップ — を担当

平成30年10月6日（土）午後1時30分～3時30分 天理大学ふるさと会館にて開催

今回のワークショップは、天理大学ふるさと会（同窓会）主催による「2018 天理大学ホームカミングデー」のお楽しみプログラムの一環として企画されたもの。内容は、綿の歴史と種類について簡単に説明した後、綿繰りと綿打ち（竹弓、唐弓）、糸車、チャルカ、スピンドルを用いての糸紡ぎの方法を実演。みなさんそれぞれに綿繰り、綿打ち、スピンドルを用いての糸紡ぎを体験していただきました。参加者は17名。ご参加くださいましたみなさん、ほんとうにありがとうございました。



【講演会：綿に親しむ — 現代の匠による綿打ち実演と綿のお話】 — 丹羽正行氏—

平成30年9月29日（土）午後1時30分～3時00分 会場：天理大学附属天理参考館

講師の丹羽正行氏は名古屋にある丹羽ふとん店の4代目。ものづくり日本大賞・内閣総理大臣賞を受賞されている「現代の名工」のお一人です。また、唐弓を用いての古式綿打ち技術の保存と継承にも取り組んでおられます。

平成25年に梅田正之が氏のもとを訪ね、直接綿打ちについてご指導をいただいていたご縁で、今回の講演会では梅田が総合司会を担当させていただきました。当日の参加者は72名。綿についての詳しい説明はもちろん、現代の名工による本物の技術は圧巻でした。



〈自宅織機作品番号4, 5, 6 — 生成り手紡ぎ木綿布を織り上げる—〉

No. 4 平成30年9月30日 木綿庵で栽培した綿を用いて、梅田が手紡ぎした糸で織った初めての作品。整経作業は8月24日。織り上げは9月30日。整経長442.0cm。整経重100.0g。経緯糸ともに和綿の手紡ぎ糸。経糸数192本。双羽。織幅9.0cm、布丈325.0cm。

No. 5 平成30年10月21日 整経作業は10月13日。織り上げは10月21日。整経長250.0cm。整経重未計測。経緯糸ともに和綿の手紡ぎ糸。経糸（たていと）を梅田正之が、緯糸（よこいと）は妻の梅田晴が手紡ぎした糸を用いた。経糸数240本。片羽。織幅25.0cm、布丈25.0cm。

No. 6 平成30年10月23日 前作No.5を織り付け中、経糸に頻繁に不具合が生じたため、一度切り離して巻き取り部分を調整し直し、再び織り始めた作品。織り上げは10月23日。経糸数240本。片羽。織幅25.0cm、布丈35.0cm。糊を洗い落とした上で、天理教の教祖に御供えさせていただく。

【綿の加工の作業記録】（梅田1人の作業量）

- ・糸車を用いての糸紡ぎ量（和綿：平成28年, 2016産。丹羽正行氏による打ち綿）
9月24日～10月23日（作業実日数20日）糸の総量114.1g（30.4匁）総時間312分（5時間12分）
※1分間≒0.366g 1時間≒22.0g（5.9匁）